

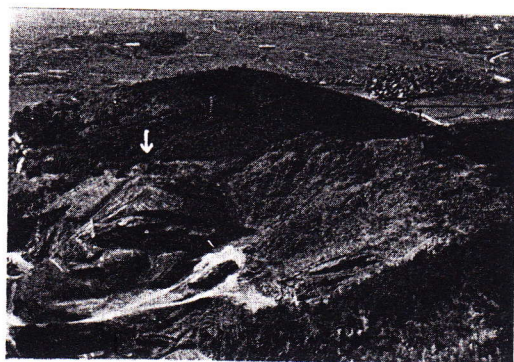
花山古墳

花山古墳群



花山古墳緊急調査報告

和歌山市岩橋花山



花山宅地造成工事現場

和歌山市教育委員会

昭和39年

出版に際して

古墳が上代の遺跡として重要なものであることは云うまでもなく、我が国の様な住居遺構の乏しい場合は又格別である、古墳のうちに地上では失われてしまった古い時代の文物が最もよく保存されているからである。

和歌山市の東方、岩橋千塚古墳群は東は天王塚から西は大日、花山に連なる丘陵に前方後円墳を交えた大小五百有余基の古墳が群集する様は一大偉観であり、これらの大群集墳を作った当時のこの地方の繁栄を無言のうちに示している。

目まぐるしく發展変化する都市づくりは必然的にこの静寂の靈地をもそのままにはさせておかない。都市近代化に伴う土木事業はその機械力を駆使して古墳を崩壊し、遺跡を破壊します。したがってある程度は時代の要求に應ぜざるを得ないのが現状である。

本書は宅地造成工事に伴う緊急発掘調査の報告書であります、この古墳の岩橋千塚古墳群における位置づけを考える時、必ずや古代文化の究明に大きな貢献をもたらすものと確信いたします。

調査に当っては土地所有者、工事請負者の深い理解と協力により破壊寸前に事前調査を行うことが出来ました。

又、県文化財専門委員羯磨正信先生はじめ、県、市文化財関係者、若き同好の先生方が予算、工期等、僅少をもよく克服され、調査が予期以上の成果をおさめました。関係各位に深く敬意を表します。

昭和三十九年二月

和歌山市教育委員会

教育長 梅本新十郎

目次

I、調査の経過	2
II、花山古墳の位置と周辺の地形	3
III、各説	5
一、第十号墳	5
1、第十号A墳	5
(1) 位置と墳丘	5
(2) 内部主体	5
2、第十号B墳	6
(1) 位置と墳丘	6
(2) 内部主体	6
(3) 出土遺物	6
3、考察	7
二、第十一号墳	9
1、位置と墳丘	9
2、内部主体	9
3、考察	10
III、結び	11
V、図録	12
一、花山古墳分布図	12
二、第一図「花山第十号・第十一号墳平面図」	12
三、第二図「花山第十号墳断面図」	12
四、第三図「花山第十号B墳」	13
五、第四図「花山第十号B墳」	13
六、第五図「花山第十号B墳」	14
七、第六図「花山第十一号墳」	15
八、第七図「花山第十一号墳」	15
九、発掘調査記録写真	16

和歌山市岩橋花山

花山古墳第十号、十一号墳

中 武 植 羯

尾 部 田 磨

憲 吉 法 正

市 宏 彦 信

1、調査の経過

1、調査担当者

2、調査員

3、調査本部

4、調査協力者

工事施行者

堀磨正信	梅本新十郎	和歌山市教育委員会教育長	中央公民館長	和歌山市文化財保護委員	和歌山県文化財専門委員	和歌山県教育委員会社会教育課文化財係	土地所有者	工事施行者
植田法彦	堀玉安達	社会教育係長	坂口寿男	田中敬忠	小池良吉	小賀直樹	本多勇	久保田昌男
武部吉宏	塩路保雄	文化財担当者	吉本義見	宮田啓二	坂田総一郎	小賀直樹	神木清吉	目良道雄
中尾憲市	大谷力造	文化財担当者	田伏弘治	松田茂樹	異三郎	小賀直樹	目良道雄	

なお、発掘調査にあたりをくのかたがたの協力をえた。左に芳名をあげて、心から感謝の意を表します。

和歌山県立大成高等学校郷土部一同、壺井公彦、大野嶺夫、藤本良平、西川泰寿、石井幸一、田口千恵子、林あやみ、西垣内青年会、山田鹿一他八名、西垣内区民一同

近時我が国都市人口の急激な膨脹によって、都市周辺の丘陵や山麓が削られ、工場・宅地造成等の土木事業によって、多くの埋蔵文化財が破壊され、又破壊の寸前にあるので、全国各地において「埋蔵文化財を守る運動」が強力に推進されている。^{注1}本県も矢張りこの例にもれない。特に紀ノ川河口にある和歌山市の後背部は、古墳の大群集地帯であって、既に昭和三十五年山麓を削り取って鳴神団地が出来上った。この際多数の埴輪片が出土しているが、果して古墳の破壊されたものか、又は埴輪の窯跡であったのか、その詳細さえ不明である。これは本県において稀なる出土埴輪であって、考古学上にも問題となっていることを考えると誠に残念なことである。

そこで和歌山市教育委員会では、今後の埋蔵文化財保護の立場から、又、故谷井濟一氏・梅原末治博士の年来の懸案であった岩橋千塚を中心とする古墳の分布図と調査カードの作成を昭和三十七年度の事業として、十二月より三月に及ぶ現地踏査を行なって完成した。その結果、大正十二年の調査を含めて約五百余基の古墳を確認した。

この調査の実施中、花山丘陵の一部が埋立用の採土と宅地造成をかねた工事が行なわれた。工事は花山丘陵の西南部より始められたので、古墳の所在地には関係ないと考えていたが、工事は次第に山麓より上

部に進んで行ったため、このまま工事が進めば丘陵背部にある古墳にも破壊の及ぶことを恐れて、土地所有者と和歌山市教育委員会との話し合いにより、工事を一時中止すると共に、緊急調査のため文化財保護委員会に国庫補助を申請し、所有者の協力を得て、木古墳の緊急発掘調査を実施した。

又調査終了後、昭和三十八年五月十一日文化財保護委員会から齊藤忠博士の御視察をいただき、調査に対し種々御教示を得たことは、調査員一同にとっては感銘深いものがあつた。

最後にこのようにして本県では初めての国の補助と土地所有者の理解によって、事前調査を実施できたこと、更に前記の諸氏の絶大なる御協力をいただいたことについて、調査員一同深く感謝の意を表すものであります。

〔注一〕「平城京を護る運動」を契機として文化財を護る運動が各方面で展開されている。

〔一例〕「戦後の遺跡破壊資料」——古代学研究三六——
(古代学研究会一九六三年九月)

〔注二〕和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告第一輯——和歌山県、大正十二年——参照

II、花山古墳の位置と周辺の地形

和歌山線の田井ノ瀬駅南西約七〇〇米の地点にある花山は、高さ海拔七〇米、底面積一平方メートルにも満たない孤立した小丘陵である。中央構造線の紀ノ川からすると南岸にあたり、丘陵の地盤は古生層に属して、緑泥片岩質の岩盤である。

この丘陵の南には、大日山・前山に続き特別史跡岩橋千塚古墳群等紀北における大群集墳が存在していて、周辺は紀ノ川によって形成された沖積平野が眼下に展開されている。

これら一連の古墳群は明治四十年代に地区民のために大規模な盗掘が行なわれ、更に戦時中これらの丘陵に要塞を築いた部隊は、いたる所に防空壕を掘り、あるいは又開墾・最近の宅地造成等によって多くの古墳が破壊され、現在完墳として保存されている数は非常に少い状態である。

岩橋千塚古墳群については、既に大正十二年に調査がされ、特別史跡に指定されているが、この指定史跡内に存在する古墳の数は、特別史跡岩橋千塚・大日山・前山及び花山と続く一連の丘陵の古墳数と比較すると、約四分の一にも満たない数であつて、和歌山市教育委員会はこの全貌を明らかにするため、分布図及び調査カードを作成した。

この中にある花山は、前方後円墳を含む四〇基の古墳が確認された。分布状態はいくつかに分れた尾根の背部及び支脈の自然の地形を利用して、構築されていて、丘陵の東部に多く分布している。そして今回調査した花山第十号・第十一号墳は、南につきて尾根の支脈を利用して構築されたものである。

〔注一〕表紙「花山古墳所在地図」参照

〔注2〕 和歌山大学、岩橋勉助教授の調査による。

〔注3〕 地区の古老談による。

〔注1〕 和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告第一輯——和歌山県

・大正十二年——参照

〔注5〕 昭和三十七年度和歌山市教育委員会主催。

〔注6〕 図録二「花山古墳分布図」参照

〔注7〕 花山古墳調査カードメモ

古墳調査 番号	形	式	現	状	備	考
1	円墳	破	壊	(伝)横穴式石室		
2	前方後円墳か	破	壊	円筒埴輪		
3	円墳			横穴式石室、円筒埴輪		
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10	前方後円墳	掘	今	横穴式石室、管玉四箇、 ガラス玉二箇		
11	円墳	破	壊	横穴式石室		
12	円墳	破	壊	(伝)粘土槨、玉類		
13	円墳			横穴式石室、石柵、須恵器		
14				(伝)横穴式石室		
15				横穴式石室、須恵器		
16				横穴式石室、須恵器		
17				横穴式石室、須恵器		

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	円
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	墳
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	破
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	壊
																							(伝)横穴式石室
																							円筒埴輪

Ⅲ 各 説

一、第十号墳

前方後円墳であるが、元来は石室が二ヶ所存在していたものと仮定して、A墳・B墳と区別した。

1、第十号A墳

(1) 位置と墳丘

本古墳は今回調査した支脈の後方に位置していて、その突端部の自然地形を後円部に利用した前方後円墳であることが測量の結果知ることができた。^(注1) 主軸は北三十度西偏で前方部をほぼ北に向けている。全長四四米、後円部直径二五米、後円部高さ二・七五米、前方部端巾一五米、前方部高さ一・七五米、前方部頂と後円部頂との比高は一米で後円部の方がわずかに高く、所謂柄鏡式前方後円墳である。^(注2)

前方部はほぼ原形をとどめているが、後円部の上部はかなり削り取られている。これは前述した部隊が要塞を後円部墳丘に設けた際に破壊したものであろう、現状でも古墳の中心部に長い壕が残存していた。

トレンチは三ヶ所設け、^(注3)

Aトレンチは後円部中心より東へ巾二米、長さ一九米、長さ四六米、Bトレンチは後円部中心より東へ巾二米、長さ一九米、Cトレンチは後円部南のすそ部に巾二米、長さ七米を入れ、その結果、^(注4) Aトレンチでは、後円部の中心部より南は茶褐色の盛土即ち第4層（第十号墳断面を1〜6層に分ける——図録四参照——）で、Bトレンチとの交叉地点では二米の厚さがあった。第4層の下は薄ねずみ色の粘土層即ち第3層で二五厘の厚さがあって、Bトレンチとの

交叉地点から南へ一・七米の所で切れており、その下は地山の第2層であった。

後円部の北側断面はきわめて複雑で、一番上層は、赤褐色の盛土層即ち第6層で七〇厘の厚さがあった。二番目には、後円部の南から続いている第4層の盛土が約一米前後続いて、そして三番目には、この第4層に一部おいかぶさるような状態で角礫の含んだ黒褐色の腐蝕土層即ち第5層があって、厚さ五〇厘前後で、前方部へ五米五〇厘のびていた。四番目には、後円部の南から続く第3層が前方部へ長く続き、最下層は第2層の地山であった。又前方部は後円部から続く第6層の盛り土が六〇厘の厚さで全体に張りめぐらされ、その下は後円部から続く第3層が二〇厘前後の厚さで、Bトレンチとの交叉地点から二七・三米続いていて、第3層の下は第2層の地山である。なお第3層が終っている地点から北へ七〇厘の所で一部軟質岩^(注5)即ち第1層が認められた。

Bトレンチでは、Aトレンチとの交叉地点において第4層が厚さ二米あり、その下は第3層が二五厘あって、これが東へ八・二米続いて、そして先端部は外彎曲の状態を終っており、最下層は第2層であった。

Cトレンチでは、上層は赤褐色土層が四〇厘の厚さであって、その下は地山であった。一部軟質岩層も認められた。

(2) 内部主体

後円部には石室らしい何んらの遺構も発見することができなかった。（墳頂が相当削り取られて破壊されているが、元来もし石室があったと仮定するならば、この時に既に破壊されてしまったのだらうか）

〔注1〕図録十「発掘調査記録写真No.1」及び図録三「第一図花山第

十号・第十一号墳平面図」参照

〔注2〕図録四「第二図花山第十号墳断面図」参照

〔注3〕図録三「第一図花山第十号・第十一号墳平面図」参照

〔注4〕図録四「第二図花山第十号墳断面図」及び図録十「発掘調査記録写真No.2・3」参照

〔注5〕図録四「第二図花山第十号墳断面図」参照

2、第十号B墳

(1) 位置と墳丘

本古墳は前方後円墳の後円部のくびれ部に位置したものであったが、独自の墳丘は全くなく、Aトレンチによって地表下二五〇厘のところから蓋石の一部を発見した。

地層を上から順に説明すると、四〇厘までが第6層の盛り土で、この層中に石室の一部が認められ、その下は厚さ二〇厘前後の第3層の粘土層があつて、最下層は第2層の地山になっており、石室の基底部は約三〇厘第2層の中に入っていた。

(2)、内部主体

主軸を北三十度西偏する竪穴式石室で、石室の大きさは一八五〇×五五〇厘、高さ五〇厘の非常に小規模なものであった。蓋石は四枚発見したが、発掘の際には既に南側の一部が消失していて、石室内部はほとんど土砂で埋もれていた。

石室内部のようにすを下から順に説明すると、石室基底部に厚さ七〇厘、巾二〇〇〜三五〇厘の扁平状の割り石が七枚敷かれており、その上に二〇厘前後の第3層（粘土層）が張りめぐらされていて、この層中には一部側壁が入り込んでいた。さらにその上に厚さ五〇〜二五〇厘の石が側壁として二〜三枚積みあけられていた。石室の南側及び北側では一枚の扁平状の割り石を立てて側壁に使用し、それがたおれないように三〜四枚の石でささえ、蓋石には厚さ五〇〜一〇〇厘のものが使用されていた。

又石室内部の南側の土砂を整理中管玉四箇（内二箇は破損）、ガラス小玉二箇を発見したが、出土地点の詳細は判明しがたかった。

(3) 出土遺物

出土遺物は小型の碧石製管玉四箇、（内二箇は破損）大きさは完

形品で長さ一・六匁、直径四耗と、青色のガラス小玉二箇、直径六耗^{注10}のもの以外は発見できなかった。しかも前記のごとく出土状態は石室内の土砂整理中発見のため位置はまったく不明である。

〔注1〕図録三「第一図花山第十号・第十一号墳平面図」参照

〔注2〕図録四「第二図花山第十号墳断面図」参照

〔注3〕図録六「第四図花山第十号B墳」参照

〔注4〕図録十「発掘調査記録写真No.4」参照

〔注5〕図録七「第五図花山第十号B墳」及び図録十「発掘調査記録写真No.6」参照

〔注6〕図録六「第四図花山第十号B墳」参照

〔注7〕図録十「発掘調査記録写真No.7・8」参照

〔注8〕図録六「第四図花山第十号B墳」参照

〔注9〕〔注10〕図録十「発掘調査記録写真No.9及び実測図」参照

3、考察

前方後円墳全般について考えてみると、先ず構築面において、墳丘の基盤の地山に接して薄ねずみ色の粘土層が二五匁前後の厚さに張りめぐらされていたが、この土層は附近一帯の水田の土層と全く同じものである。

今本古墳の構築^{〔注1〕}順序を考えてみると、古墳構築以前にはこの地帯も幾分傾斜があつて、そのまゝの自然の地形に構築することは不可能なことであつただろうと思われる。従つてまず第一に前方部にあたる斜面即ち尾根の支脈の一部を削り取り地盤を平坦にして、第二に薄ねずみ色の粘土層を基盤全体に布設した。この粘土層は人工的であることは、古墳の基盤における分布状態や、粘土層の終りがBトレンチにおいて丸味をおびて終つていた^{〔注2〕}ことからしても明らかである。なお且つ前述したようにこの粘土層は附近の水田下層の粘土と全く同じで、おそらくこのことからして、古墳に布設されていた粘土層は水田の粘土を使用したものである。第三に後円部を前方部より高くするために、先に地盤を平坦にした時、削り取った地山の土を盛り土として、もしA墳が存在したと仮定すれば、石室を築造し、同時にB墳をも築造した（但しB墳築造については更に後述する）。第四に全体に附近の表土を盛土として古墳全体の墳丘を築成したものと考えられる。前方部はほとんど平坦になつていたが、元来はある程度の墳丘があつたとしても、それがどの程度であつたかは即座に判断することはできない。

次にB墳について考えてみると、既に蓋石の一部が破壊され盗掘を物語っている。側壁も一部破壊されていたが、これは盗掘後土砂が石室内に埋つた際に自然に破壊したものであろう。石室は非常に小規模なもので、石材には緑泥片岩及び石英質緑泥片岩を半々の状態で使用

されていた。近くにこれら石材の採掘跡と思われる箇所が見受けられる。使用されている石材の大きさも附近の古墳と比較して全般的に小さく、一番大きい蓋石で八〇糎×五〇糎のものである。さらに側壁に使用されている石材は、紀州の後期古墳では一般に扁平状の割り石を多く使用しているが、本古墳では立体的な割り石を使用していた。

蓋石の状態は、蓋石と蓋石とのすき間を埋めるためにさらに上に扁平状の割り石を使用しており、他の一般の堅穴式石室のそれと異なるものでなかった。又石室基底には緑泥片岩の七枚の割り石を敷設していたが、これは特別史跡岩橋千塚の第六十四号墳、七十六号墳、八十一号墳、九十四号墳等^{〔注5〕}にみられるものと同様のものではあった。

本古墳における唯一の特色は、普通堅穴式石室に見受けられるように側壁は石材のみで築造されているのに比較して、本古墳では、側壁の一部に古墳全体に張りめぐらされた粘土層を利用していたことである。即ち石室基底に敷設された七枚の割り石は、粘土層の下に敷設されたものであるから、これは粘土層をはりめぐらす以前か、又は同時に敷設されたものである。そしてこの七枚の割り石の上に直接側壁が認められたのは一部で大半は粘土層の上に側壁が構築されていた。この類例は、特別史跡岩橋千塚を中心とする本県の附近一帯の古墳群からは見い出すことのできないものである。

出土遺物の管玉、ガラス玉は本県における普通後期古墳に見られるものと同一であるが、特に管玉は長さ一・六糎、径〇・四糎の小型で精細な製作のものであった。

ようするに本古墳は、石室の構造や出土遺物の点から考えて、特別史跡岩橋千塚を中心とする本県の後期堅穴式石室と何んら変る所がなく自ら後期古墳に比定できよう。

〔注1〕 図録四「第二図花山第十号墳断面図」参照

〔注2〕 図録四「第二図花山第十号墳断面図」参照

〔注3〕 図録六「第四図花山第十号B墳」参照

〔注4〕 図録五「第三図花山第十号B墳」及び図録十「発掘調査記録

写真No.5」参照

〔注5〕 和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告第一輯——和歌山県、大正十二年——参照

〔注6〕 図録六「第四図花山第十号B墳」参照

二、第十一号墳

1、位置と墳丘

本古墳は今回の調査対象古墳中最も低い地にあつて、第十号墳後円部と著るしく接近している円墳である。即ち第十号墳墳丘の南側基部と本古墳墳丘の北側基底部と思われる地点との間かくは五米であつた。そして本古墳の南側は急勾配になり、一帯の尾根の終りを示している。

墳丘は測量しえた現状では、直径八米、高さ一・三米で、墳頂部は破壊して^(注1)いて、北側でははっきりした円形を測量することはできなかったが、南側においてわずかに知ることができた。^(注2)

封土の状態は南側壁の面では、二五厘の厚さで黒褐色の腐蝕土層があつて、その下は二〇厘の厚さの黄褐色土層が続き、最下層は赤褐色の地山であつた。北側壁の面では、二〇厘までが黒褐色の腐蝕土層で、その下は厚さ四〇厘の黄褐色土層であり、最下層は軟質岩層であつた。発掘の際には、地表下三〇厘の所で側壁の一部に達した。

2、内部主体

主軸を北三十度西偏する竪穴式石室^(注3)で石材には緑泥片岩の割り石を使用していた。石室は表土下三〇厘から認められたが、盗掘によって既に上部を破壊され、わずかに基底部が残存する程度であつた。現状では二七〇厘×九二厘、高さ三〇厘であり、基底部には北側で厚さ六厘、南側では三五厘の層中に玉石があつた。この層は玉石と土砂が攪乱され入りまじつた状態^(注4)で、南側では攪乱状態のため確認できなかったが、北側では五厘の厚さで茶褐色土層をしきつめていた。その下は

軟質岩層であり、側壁の基底部はこの軟質岩層の上に直接積みあげられていた。又玉石層は石室中央部より南側へ溝状に敷設されて^(注5)いた。さらに東側壁の一枚の緑泥片岩割り石に、巾四厘、深さ二厘のノミ加工痕^(注6)が中央部に溝となつて残存していた。遺物は全く発見することができなかった。

〔注1〕 図録十「発掘調査記録写真No.10」参照

〔注2〕 図録三「第一図花山第十号・第十一号墳断面図」参照

〔注3〕 図録八「第六図花山第十一号墳」参照

〔注4〕 図録十「発掘調査記録写真No.11・12」参照

〔注5〕 図録九「第七図録山第十一号墳」参照

〔注6〕 図録十「発掘調査記録写真No.14」参照

3 考 察

既に盗掘によって破壊された古墳であったため、遺物も全く発見することなく終ってしまったが、石室の基底部が残存していたのは、せめてもの幸いであった。

先ず第一に陵丘について考えると、本古墳の墳丘南側は急勾配になって一帯の尾根の終りを示していることは、この尾根における古墳構築の限界点とも思われる位置に本古墳が構築されたことを考えることができる。そして構築以前の地形は相当急斜面であったことを想像すれば、北側と南側においては自ら盛土の状態も違い、測量し得た南側の墳丘をもって、本古墳全体の盛土と考えることは出来ない。

第二に古墳構築の際地山を幾分平坦にしてつくっているが、前述したように元の地形が急斜面であったため、北側では地山を軟質岩層まで掘り下げ、反対に南側では地山の上に少し盛り土をすることによって基盤を水平ならしめたようである。このことは排水施設と考えられる遺構からも推測することができる。これは石室中央部より南側壁へ向って溝状に敷設された玉石層であるが、附近一帯の古墳に見られるものとは異なり、排水施設に地盤の岩層を一部利用していた点についてである。即ち北側においては、石室を岩層の上に直接築き、南側では北側と水平になる高さから石室を積みあげたことである。従って排水溝としての玉石を敷く場合、北側では玉石を敷かず、水平面から岩層の下る地点より南側に向って中央部に玉石を敷いたようである。そしてこの排水溝の上に五輊の厚さで茶褐色の土を全体に布設し、石室を平坦にしてから、さらにその上に敷石としての玉石を六〇七輊敷設したものである。これは北側においてははっきりと測定することができたが、中央部より南側においては、盗掘による攪乱状態で茶色褐土層

がはっきりと区別できず、排水溝としての玉石と、敷石としての玉石が混同していたのは残念であった。

第三に本古墳で興味を引いたのは、東側壁の一枚に残存していたノミの加工痕^{注2}であった。この石は四二輊×三四輊、厚さ一〇輊の緑泥片岩の割り石であるが、中央部の溝、もちろん表面にもところどころ点々としてノミ痕が残っていた。このノミ痕から推測すると、使用されたノミは巾一・六輊前後のもので、刃先は幾分丸味のおびたものであっただろう。考えるに、この石材はもとは側壁として使用することを目的としたものではなく、他の何かに使用目的をもっていたのが、偶然加工中に意に反した割れ方をしたものが目的が果せず、本古墳に使用されたものであろう。中央の溝は自然石を使用目的の石形に加工しようとしたノミ痕であって、作業中途で目的が果せなかったことを物語っている。

最後に本古墳の規模及び石室の構造から紀州の他の古墳の例を見出すならば、東国山第一号^{注3}・第二号墳、高尾山第二号^{注4}等と同形式のものであり、紀州における竪穴式石室としては比較的規模が大きく、古墳時代後期に比定できるであろう。

〔注1〕 図録九「第七図花山第十一号墳」参照

〔注2〕 図録「発掘調査記録写真No.14」参照

〔注3〕 金谷克己著「紀伊の古墳3」参照

〔注4〕 和歌山大学考古学研究会発行「紀伊高尾山古墳」参照

III 結 び

以上のように第十号墳は測量の結果明らかに前方後円墳であった。

後円部には石室が発見されなかったが、これは元来は後円部にも石室が存在していたのか、あるいは又くびれ部の竪穴式石室が主体であったのかも知れない。そしてB墳は石室が小規模であったが、わずかに管玉四箇、ガラス小玉二箇の発見ができ、石室の構造や遺物より考えて、後期古墳に比定できるであろう。

しかし前方後円墳の乏しい本県にあって、支脈の一部を利用した構築方法を知ることができたのは何よりの収穫であった。

又第十一号墳も本県に於ける竪穴式石室としては比較的規模の大きいものであって、既に盗掘によって遺物は全く発見することができなかったが、残存の石室から考えて、後期古墳に比定することができ

る。最後にこの花山古墳群も特別史跡岩橋千塚古墳群と同時代のものと考えられ、特別史跡岩橋千塚古墳群の範囲を現在の地域だけでなく、花山丘陵まで拡大しなければならぬことが痛感される。

〔注1〕 前方後円墳のくびれ部に主体のある例としては

一、岐阜県遊び塚古墳、小川栄一、岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告、第八冊、昭和十四年三月

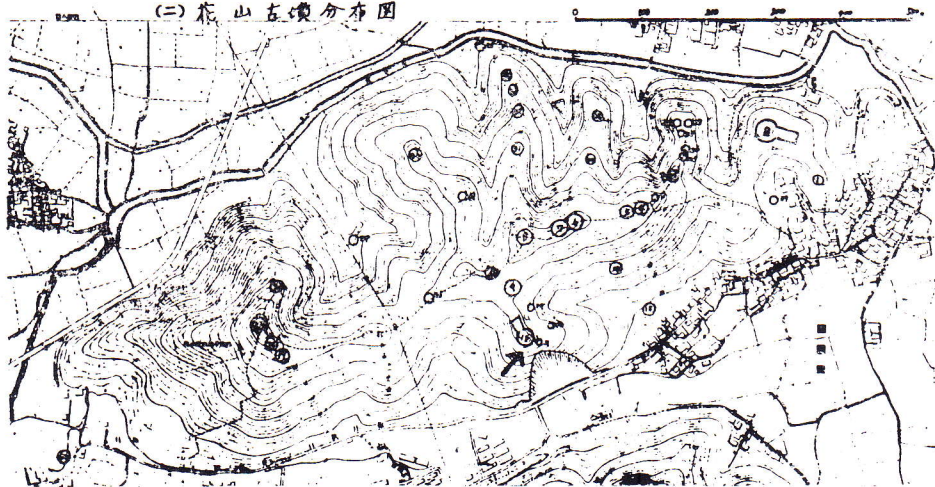
一、千葉県我孫子町高野山一号墳、吉田章一郎、甘粕健、考古学協会第二十五回発表要旨

〔注2〕 古墳の築造については

一、茨城県丸山古墳、後藤守一、大塚初重丸山古墳、昭和三十一年十一月

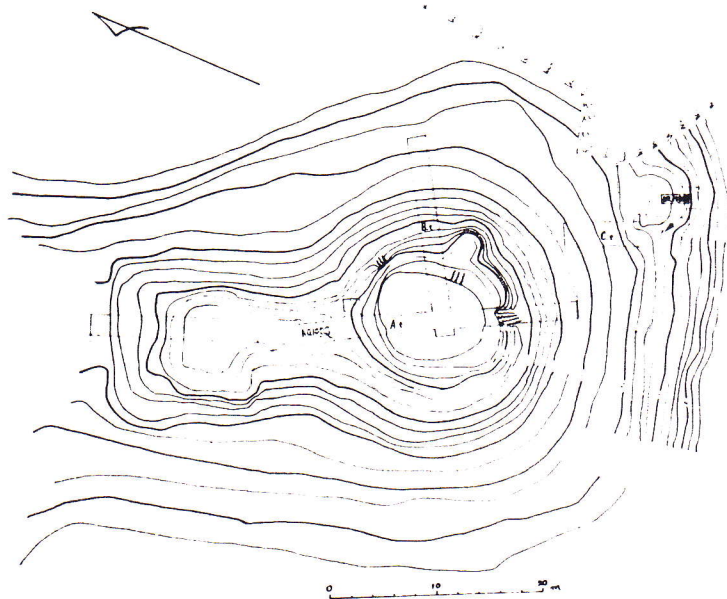
一、齊藤忠博士著「日本古墳の研究」古墳の築造の項、吉川弘文館、昭和三十七年十一月等がある。

(二) 花山左壤分布图



(三)

第一图
花山才十号才十一号壤平面图



(四)

第二图
花山才十号才十一号壤断面图

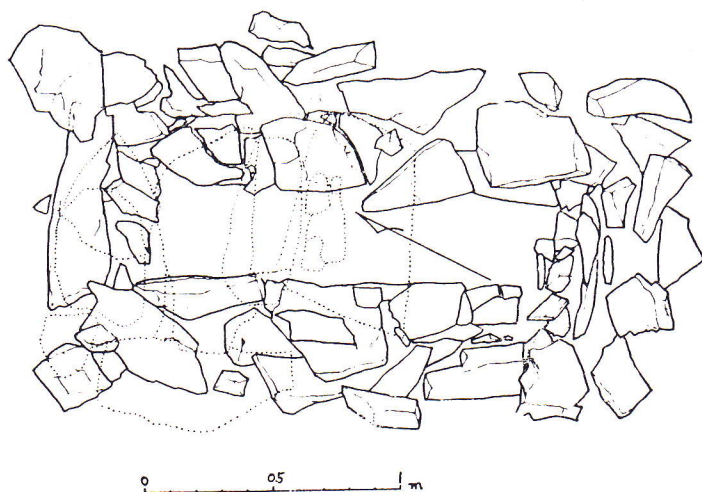


- | | |
|----------|-----------|
| 1... 岩层 | 4... 作用层土 |
| 2... 砂土层 | 5... 腐殖土层 |
| 3... 粘土层 | 6... 腐殖层土 |

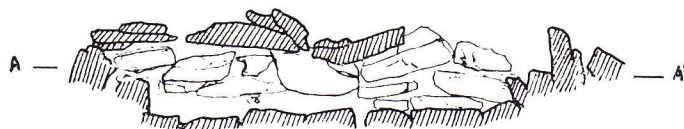
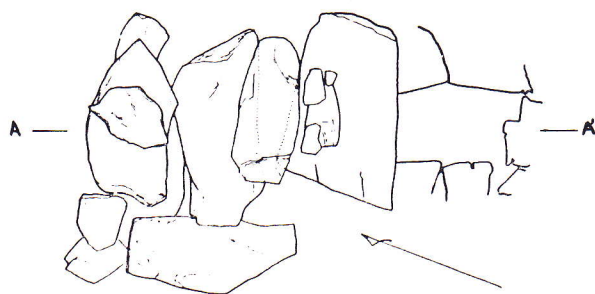
0 5 10 m



(五) 才三圖
 花山才十号B墳

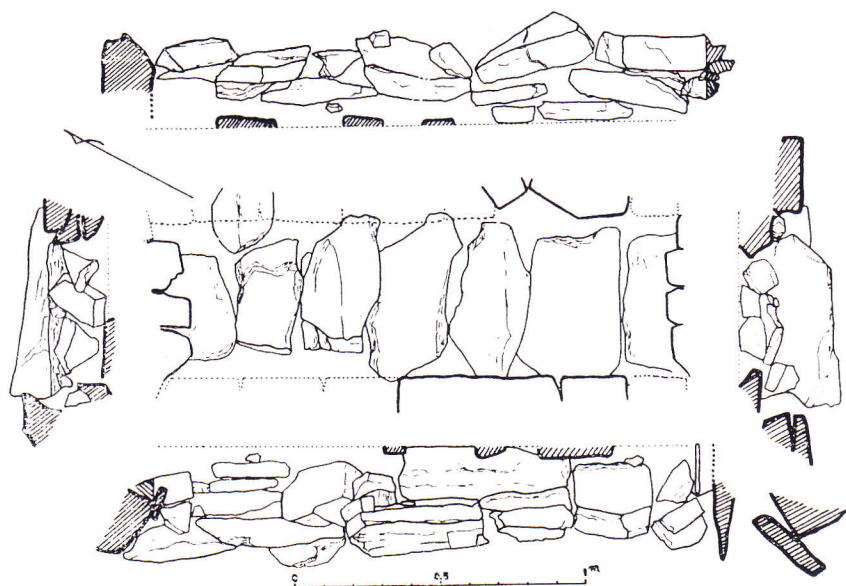


(六) 才四圖
 花山才十号B墳



0 0.5 1 m

(七) 市五園
廿化山才十号B墳



管 玉

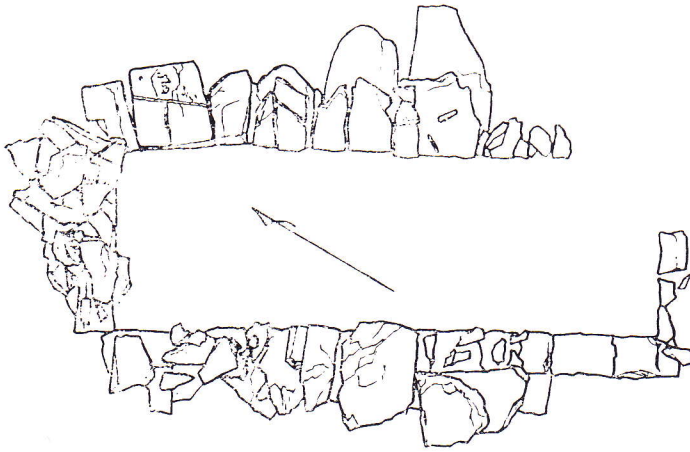


(九)

ガラス小玉

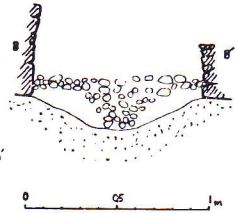
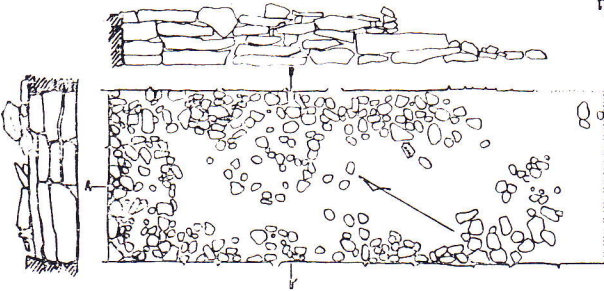
第10号B墳出土遺物

六ノ大
花山第十一号墳



0 0.5 1

(九)
才七
花山第十一号墳

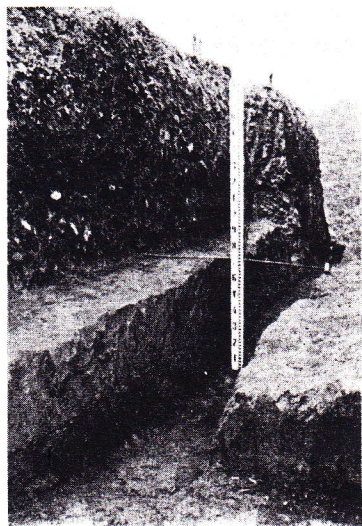


0 0.5 1 m





①

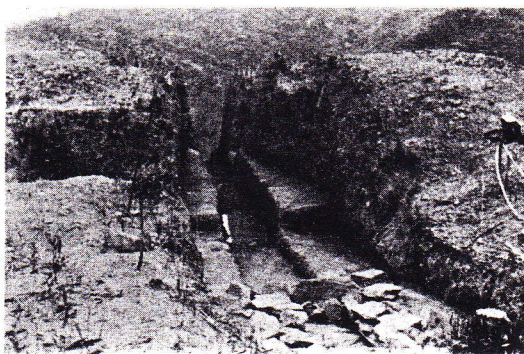


②

④



③



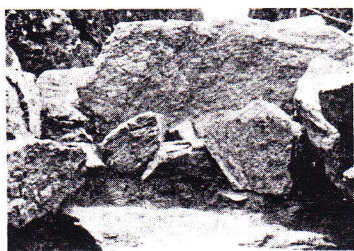
- ① 花山第10号、11号墳全景
- ② 第10号墳、Aトレンチ断面
- ③ 第10号墳、Aトレンチ（前方部ヨリ）
- ④ 第10号B墳、蓋石出土状態



⑤



⑥

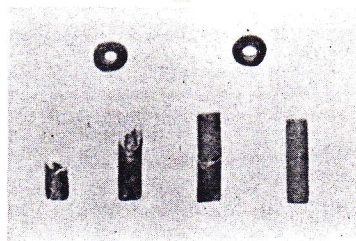


⑦

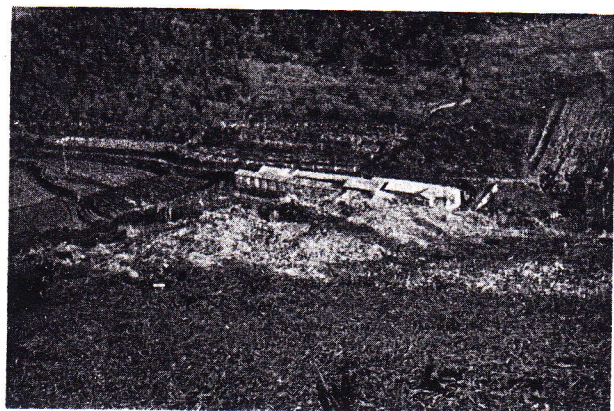
⑧



⑨



- ⑤ 第10号、B墳全景
- ⑥ 第10号、B墳石室内部
- ⑦ 第10号、B墳南側壁
- ⑧ 第10号、B墳北側壁
- ⑨ 第10号、B墳出土遺物



⑩



⑪



⑫

- ⑩、第11号墳全景
 ⑪、第11号墳石室（北ヨリ）
 ⑫、第11号墳石室（南ヨリ）



⑬



⑭

⑮



⑬、第11号墳石室全景（北ヨリ）

⑭、第11号墳、ノミ加工痕のある石

⑮、発掘調査古墳供養の会

編集後記

花山古墳群は特別史跡千塚古墳群とともに、紀州における代表的な古代遺跡と云われ、学界でも高く評価されながら今日まで全くその全貌を明らかにできていない。

本報告書は、花山古墳群中、特に重要な位置をしている前方後円墳で、宅地造成の土木工事により破壊を免れなくなり緊急発掘調査を行った記録で、本書作成にあたり調査員の方々は、公私共多忙あるいは情苦にもかかわらず、それぞれの部門を担当されました。

さらに一度作成できた報告書を不幸にも災害に遭い、再度作成されここに印刷するはこびとなりました。

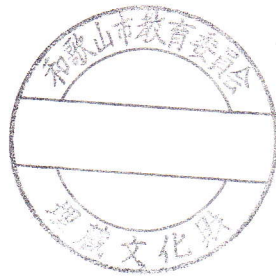
又本書中の航空写真は、自衛隊和歌山地方連絡事務所、八尾船空自衛隊の御協力によりヘリコプターで撮影したものであります。

最後に本報告書作成まで種々御協力いただきました関係者各位にたいし深く感謝いたします。

花山古墳

昭和三十九年二月一日印刷
昭和三十九年二月十日発行

編集 花山古墳緊急発掘調査会
発行 和歌山市教育委員会
印刷 KK 東洋印刷



和歌山市教育委員会